

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Attic Museum, its Contribution to Japanese Ethnology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 俊亀智 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004443

アチック民具研究の道すじ

—収蔵状況とのかねあいにおいて—

中 村 俊 亀 智*

The Attic Museum, its Contribution to Japanese Ethnology

Shunkichi NAKAMURA

In 1921 the Attic Museum was founded at Mita, Minato-ku, by Keizo Shibusawa. He and his followers conducted studies on the folk tools and utensils of Japan. Although they presented their research results on footwear, snow shoes, and basketry, among other topics, and they contributed much to material culture studies, in Japan, their work is little known. I have analyzed the Attic Museum catalog and investigated how the collections were actually used in the studies made by Shibusawa and his associates.

I. 報告のあらまし

III. 研究とのかねあい

II. EM の収蔵方式

IV. 課 題

I. 報告のあらまし

1921年、東京三田に結成されたアチック・ミュージアム（以下 AM という）は、およそ10年後、独自の民具分類体系をもつにいたった。この体系（附表1、以下 AM 民具分類という）は AM の「民具蒐集調査要目」に具体的にのべられているが [アチック・ミュージアム 1936b: 1-12], それはまた標本資料の置き場所さえ許すなら、たとえば図書の NDC（日本十進分類法）や UDC（国際十進分類法）のように資料の配架にもいかなるよう考えられていたふしがある¹⁾。

* 国立民族学博物館第5研究部

1) もちろん標本資料としての民具では、図書のように形がそろっていないから、分類そのままの順序で配架することは普通の場合にはむずかしい。なお、AM 民具分類（附表1）は AM の10年あまりにわたる民具の収集と収蔵の経験から生まれたから、たいへん現実的でしかも便利につくられている。現在ではこれを使う人はほとんどないけれども。

その理想は、1938年開館した財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（以下EMとする）において一部実現されるが、それは実際にはどのようなものだったのだろうか。

AMでもEMでも、資料の整理と収蔵の仕事は直接研究に結びついていたが、AMやEMではAM民具分類をあてはめて、実際にはどのような群をつくり、そこからどのような研究をひきだそうとしたのだろうか。

この報告はEMの終りの頃つくられた標本資料の所在簿を手がかりに、AM、EM内部ですすめられていた研究の様子を思いうかべながら、以上の点をまとめたものである。

収蔵のやり方は標本資料のいれものとしての建物や収蔵設備とも関係するから、まずその様子から説明しておこう。

Ⅱ．EMの収蔵方式

1938年、東京北多摩郡下保谷（現保谷市東町）にEMの本館が建てられた。木造平屋建て1188m²。その巨大な切妻の屋根には明りとりがあり、ひろい廊下を中心に4陳列室、5収蔵室、3整理室、それに応接室、映写室、工作室、宿直室などが配置されていた（図1）。

この建物を、一般の人たちにも公開されていた陳列室・応接室・映写室などの部分と、一般の人たちには公開されない（特定の研究者などに公開される）部分、通路・宿直室などの部分にわけ、図1をもとにして、それぞれが建物全体にどれほどの割合をしめていたかを出してみると、つぎのようになる。

A 公開部分

陳列室	40.6%
応接室	1.2%
映写室	3.4%

B 非公開部分

収蔵室	32.5%
整理室、工作室	8.5%

C その他

通路、トイレ	10.0%
宿直室、土間	3.8%

このうち整理室、工作室はほどなく収蔵庫となったから、EMでは陳列のための広

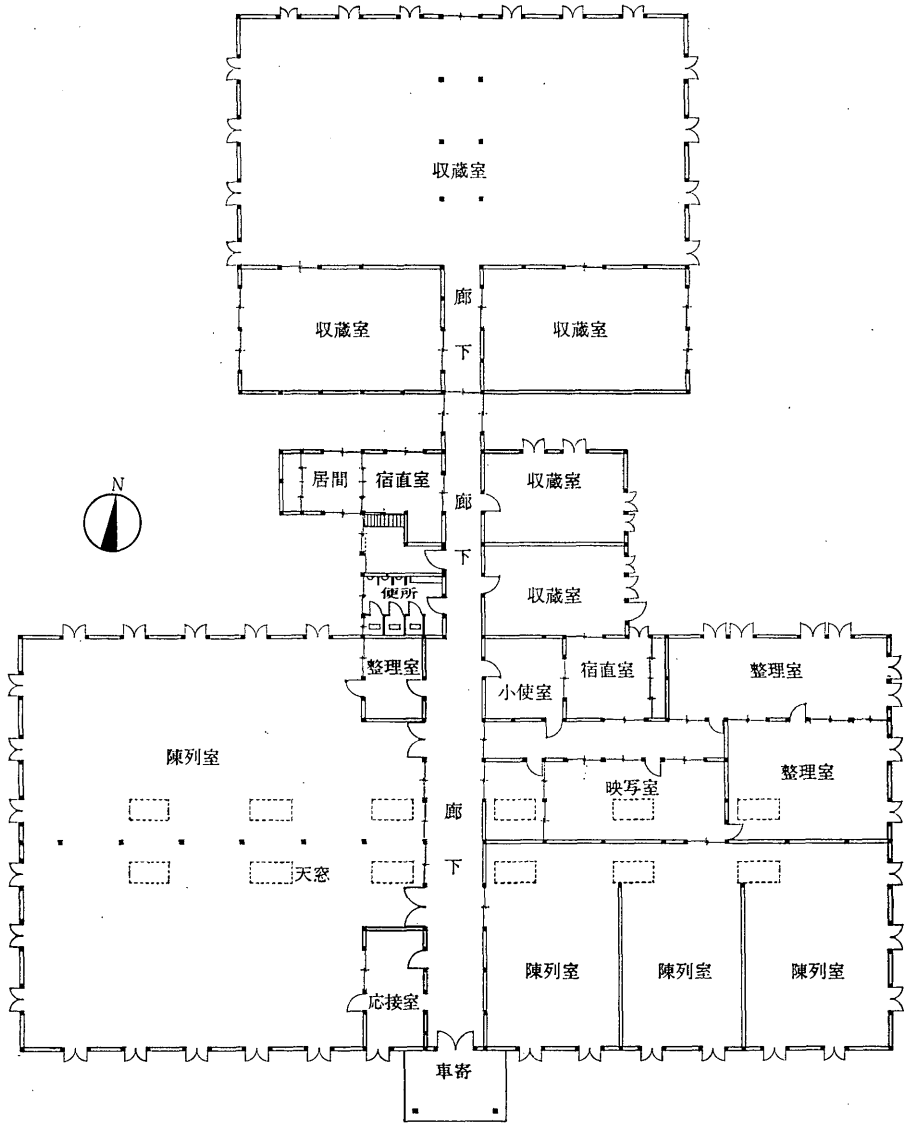


図1 財団法人日本民族学協会附属民族学博物館(1938-1962)本館の平面

さと標本資料の収蔵部分とがほぼ同じ割合をもっていたことがわかる。その点から、EM は建てはじめから展示中心の建物としてではなく、多くの標本資料を保存し、研究に役立たせるであろう研究施設として計画されていたことがわかる。

5つの収蔵室は入口に近いところから、便宜的に第1室、第2室、第3室、第4室とよばれ、いちばん奥まった大収蔵室はまんなかから2部分にわけ、第5室、第6室

となっていた。EM が解体されたとき、第5・第6室には AM から移された国内外の標本資料。第4室には財団法人日本青年館から移管された資料。第3室は日本民族学会が1938年に派遣したハサリン調査によって集まった資料、同1937年北千島占守島の発掘調査の出土資料など。第2室は、一名漁具室とって漁業関係の標本資料。第1室は AM 以後に集まった資料。整理室には第2次大戦前シンガポールで集められたインドネシアやオセアニアの資料。それに台湾のカゴ細工などがおかれていた。陳列室の一部には1957年以降3次にわたって派遣された東南アジア稲作民俗文化総合調査団収集の資料が常時陳列されていた。

このように、結果的にみて、EM では集まってくる資料をまず集めてきた人別（採集者、収集者別）にわけ、場所をかえて収蔵する方式がとられていた。それは、おおくの場合、EM のいい方にしたかえれば地域文化別、むしろ種族文化別に標本資料をわけておくやり方でもあった。

第1室には壁に木の作りつけで押入のような棚、第2・第3室は奥行45cmほどの移動できる粗末な木の棚、第5・第6室には奥行90cm、幅181.8cm、高さ2.5mくらいの木の戸棚があり、資料を保管するのにつかわれた。

第5・第6室の戸棚は上中下3部分からなり、下段は4つの引出し、中段は中がみえるガラスの戸棚、上段は戸袋になっていた。この戸棚は、建物を解体するときわかったことだが、四隅に支柱をたてた作りつけのもので、支柱は床板をつきぬけて床下まで深くつきささっていた。

この戸棚は、下段の引出しへ衣類をいれ、中段のガラス棚には履物をいれ、上段の戸袋へはワラ細工のしめ飾りの類をいれるというように、つとめて AM 民具分類体系を生かすように、同じ民具は同じ場所にまとめておくよう工夫してあった。

なお、これらの戸棚にはいりきれないものは壁に釘を打ってそれにかかけ、戸棚の中段のガラス戸のなかは、いまでいう収蔵展示風に整理されていた。

AM 以来の資料を収めた第5・第6室では、とくに同じ民具が数多く集まっているような場合、それらを形の違いによってわけ、さらにそのなかは県別にわけて配架する方式がとられた。

原則的には以上のものであったとして、実際には EM ではどのように民具をわけ、どのように配架していたのだろうか。

1962年、EM の標本資料が国に移り、当時の文部省史料館へ移されるようになったとき、資料の収蔵状況のもの形の尊重し、同じ棚にある民具は同じ箱に入れて運び、AM の民具分類をなるべく生かす方法がとられた。附表2は第5・第6室と第2室の

分の箱の番号、内容、点数（件数）を、そのとき作られた EM の『民具標本所在簿』から抜きだしたものである。

AM や EM では理想としては、同じ民具は同じ場所にまとめておくべきものだったのだから、附表 2 と EM の収蔵状態を思いうかべながら、この所在簿からさらに同じものの箱同志をまとめ、その収集場所(所在地)別にわけてみると表 1 のようになる²⁾。

表 1 は、ようやくその土台をかためつつあった AM や EM の民具研究がどれほどの研究素材の上にきずかれつつあったか（もちろん館に集められた資料以外の資料についてもおおくの調査がなされた）、そのひとつの目安にすることができる。

もしそうだとしたら、これらの標本資料はどのような研究に結びつき、どのような研究方向をひらいていったのだろうか。

AM, EM の仕事は、まだ十分に紹介されていないのだから、表 1 の順序にしたがって大筋をみてゆこう。

Ⅲ．研究とのかねあい

1. 食器・台所用具など わん（碗、碗），木鉢，皿，かめ・壺，柄杓，杓子，桶，たらい，メンパ，鍋・鍋とり・鍋しき，べんけい，火打かね・火打石・火打箱，箒，雪かき，その他。1960年代のはじめまでに約 420 点以上を集めることができた。標本資料が収集された県の数は全都道府県の 83%（これを収集県率といっておく）にたった。そのなかにはその地方独特のものが含まれていた。これらの資料をもとにして AM や EM の人たちは民具としての食器や台所用具のさまざまと、おぼろげながら、その輪郭とをつかむことができた [宮本 1973: 45-56]。

しかしこの分野の資料は、いわばくれ手（寄贈者・寄託者・貸主など）本位で集まるものが大部分³⁾。AM では木地屋の人たちの仕事や曲物などにも注意していたが

2) 記録によって EM の収蔵状況を具体的に知るには 2 つのやり方が考えられる。ひとつは『民具標本収蔵原簿』の備考欄に記入されている収蔵場所の番号（記入されているものと、いないものがある）をもとにしてある棚にどれほどの民具がおかれていたかを推しはかるやり方。もうひとつが『民具標本所在簿』によるやり方である。前のやり方には多少の不安があったので、今回は後のやり方にしたがった。

EM の開始期から 60 年前後まで標本資料の整理にたずさわられたのは宮本警太郎先生である。宮本常一先生は日本常民文化研究所だったし、正面きって民具学を提唱されるようになるのはずっと後のことだった。この報告で引用した文献に宮本警太郎先生の文献が多いのはそのためである。とくに宮本先生が病氣になられてからは八幡一郎先生が財団の博物館担当理事として全体を指導された。

3) AM, EM の標本資料の集め方には 2 つのやり方があった。ひとつは集め手としての館自体が特定の資料を限定して集めた場合、もうひとつは多少の枠や集め手のえりごのみはあるかもしれないが、くれる人（くれ手）のもってきたものは、おおむね何でももらっておくやり方である。ある資料を集める場合この 2 つのやり方は併用されるのが普通であるが、前のような傾向がつよいのを集め手本位、後の傾向がつよいやり方をくれ手本位ということにしよう。資料の集め方には寄贈、寄託、購入、借用、交換、移管、などの方法があるが、AM, EM では原則的に寄贈（くれ手が資料を寄贈する）であった。

表1 『民具標本所在簿』の内訳

県 種類	北海道	青森	秋田	山形	岩手	宮城	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野	静岡	愛知	岐阜	滋賀	三重	和歌山	
1 食器, 台所用具 (11, 12, 13, 14)	1	16	2	11	2	9	2	1		4	1	11		29	3	4	5	3	11	11	48	9	2				
2 自在かぎ(11)	3	1											1	1						1	1						
3 ランプ, 行燈 (12)				1	3					1		2	3							1	1	9			1		
4 煙草いれ(14)			1	1	1				1	3	1									3	1	8			1		
5 笠(15)			2	1	6	2	1		1	1			10	1						1		3	4		1		
6 衣類(15)	2	2	17	8	25	6			2	3	2	26	36	1	1	2				6	1	31	4	1	9		
7 みの, シュロ帽子 (15)	2	8	2		1	2	1		2				12	3	2					1	1	3	3				
8 わらぐつ, 草履 あしなか, 草鞋 (16)	47	42	18	46	10	15	8	7	8	10	13	29	6	320	9	7	7	3	54	50	34	36	10	7	6		
9 下駄, 竹下駄 (16)	1	1	7		4	1						1	3	6								1	1				
10 田下駄(16)			1	2		1						1		4	1	1	1	4	6			2					
11 かんじき(16)	1	1	5		2				1					24						1	1			4			
12 おはぐる道具, くし・かんざし類 (17)			1	3	1									2	1	5						1					
13 きね, うす(13, 21)	2	1		2								1	2									1					
14 農具(21)			3	5	6	3	6	1	5	4										3	7	1	1	1	1		
15 蚊やり, 砥石袋 (21, 22)	1	2	2	5	3	1			1	4	6	1	2	7	1	6	3	2		7	1	6	3	2			
16 鉈, 鉈さや(22)				2								3	1							2	2						
17 狩猟具(23)			2	5										2						1		3					
18 漁具(24)	3	3	3	4	3	1	1	2	21	56	21	8								2	9	12	1	5	3		
19 紡織用具(25)			4	1	16			2	1	9	4	11	2								3	1	4	1	1		
20 畜産用具(26)	1	4	5	2	1				4	2	3	2	5	2	7	1	5	3	2								
21 ふご, 踏篋, い じこなどのワ ラ細工	1	3	6		3	1	1						9	4	1	1				2	4	2					
22 竹筒, さしなど のタケ細工	2	1	2	1			1	1	1	3	2									1	3	4	4	2	1	1	
23 ふるい, いかき (21)	1								1	1	2	4								2	1	5	2				
24 背負い運搬具 (30)	4	15	8	7	4	5	3	2	4	7	17	18	3	4	2	5	14	17	11	12					1		
25 こだし, てご類 (30)	1	5	11	1	11	1	1	1	3	1	6	10	1							1	3	5	13	3			
26 そり, ネコ車 (30)	1	1	1	1										1													
27 天秤棒(30)												1	1														
28 信仰, 行事用具 (62, 63)	4	26	10	22	4	3	2	1	14	5	1	30	24	1	1	2	1	22	11	32				5	1	1	
29 たこ, 羽子板, こまなど(70)			1	1	7				8	3	22	1	1														
30 笛(64, 70)												1								1	4	6					
31 人形など(80)	1	3	17	10	11	9	12	3	1	7	4	65	5	4	1	6				1	11	3	31	1	1	2	4
計	15	81	192	74	199	27	82	26	22	34	64	63	302	33	550	36	29	32	26	173	138	259	95	29	31	13	

備考の数字は箱の番号, [] の数字は国外を含めた合計

奈良	京都	大阪	兵庫	鳥取	島根	岡山	広島	山口	愛媛	香川	徳島	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	(国外)	計	備考
2	1	4	4	3	12	14	2	7	2	10	1	1	2	1	5	36	10	(23)	302	506, 518, 537, 538, 541, 542, 540, 625, 634, 6南 [424]			
		1																	2	(4)	11	5東, 5南 [21]	
		1						1											1	(3)	25	624, [44]	
		3				1			2		3		2	1	1	4	1	(1)	39	526, [38]			
		1		1	1						3	2	1					(2)	51	525, 543, [83]			
1	2	1	1	12	4	1	6		6	1	1	4			3	20	3	(1)	251	547, 566, 564, 565, 569, 570, 571, 572, [351]			
			1						4	4	2							(5)	59	5西, 6東, [89]			
3	2	9	13	6	25	8	27	13	25	13	12	12	19	1	22	1	11	6	57	12	(3)	1099	550, 551, 553, 556, 5東, 546, 6西, 552, 554, 5北, 548, 557, 558, 559, 560, 563, 5南, [1393]
								1			1	1				2	13					44	555, [66]
						2																26	549, 561, 202, [16]
				1	2					1												44	549, [55]
						1													1			16	526, [35]
1	1					1	1													3	(7)	16	6西, 6南, [48]
1				1	8	2			2	1	1		1	3		6	4	(7)	77	519, 6西, 6南, [142]			
					7	1			1		1					1	1					59	521, [73]
																				1		11	6西, [26]
						1										1	1	(1)	16	5北, [22]			
	1	7	2	1	1			8		8			1	19	12	(11)	218	第2室, [361]					
			1	3	2		1	1	1				1	1	6	(3)	77	5南, 626, 627, 629, 630, [135]					
		5	2	6	2	2	1	3	2	1	1			22	(2)	96	544, 545, 546, [126]						
		1	1										1		5	1	(1)	47	621, 633, 635, 636, [70]				
1	3	2	2	2	1	1		6	1							15	3				68	606, 614, 631, [85]	
		2		3				1		1						16	(1)	42	604, 616, 617, [54]				
1	3	1	6	2	9	2	2	1	13	2			7		1	34	12	(11)	259	547, 548, 5東, 6東, 5北, 6南, 601, 602, 603, 613, 611, 612, 615, [292]			
		1	1	4	1	4	2	1	1	4			2	4		16	2	(5)	121	605, 619, 620, 622, [130]			
						1													6		6	5東, [15]	
				1		1													3	(2)	7	5南, [9]	
		2	1	2	5	5	7	3	4	1	7		6	7	1	3	14	7	(5)	298	520, 522, 523, 528, 530, 628, 632, [423] 一部農具あり。		
											1			1		4	5	(8)	55	513, 607, 6東, [64]			
	1										1										14	6東, [31]	
11	23	13	2	2		7	2	4	3	1	2	8		7	2	1	2	11	3		317	607, 524, 5北, 5南, 6東, 6南, [381]	
18	31	27	46	13	52	27	111	52	47	39	17	80	52	4	66	19	20	25	320	80		3771	[5040]

[高橋 1939: 28-43], たとえば後のアシナカのように、ひとつひとつの民具についてその広がりや作りやなり立ちを調べるにはいたらなかったのではなかろうか。

2. **自在かぎ** 21点。収集県率18%。くれ手本位で集められた。

3. **ランプ・行灯など 照明用具**44点。収集県率は26%にすぎなかったが、それらの資料をもとにして庶民生活における灯火の移りかわりを推しはかることができた[宮本 1964]。EMではそれらの研究にもとづいて借出し移動展用の標本資料を組み、灯火の変遷についてのパンフレットがつけられた。大部分くれ手本位で集められた。

4. **煙草いれ** AMの分類では煙草の関係は飲食用具と同じ項目にいれられた。この分野の資料もくれ手本位。それでもいろいろな形のものが集まった。

5. **笠** 1938年、民族学研究所関係の仕事として、当時一般でつかわれていた笠(当然農山漁村中心)の全国的アンケート調査がおこなわれた。項目は種類・形・材料・作り方・呼び名・使いみち・作られた所・移りかわりなど。それはAMの民具研究の線にそって、それをいっそう発展させたものだった。その結果、1503通のうち378通(約25%)の高回答率をうることができた。この調査によって民具としての笠には編み笠・組み笠・縫い笠・押え笠・張り笠などがあり、それに形のうえのわけ方10を組みあわせて32形式にわかれることがわかり、それぞれの分布や使いみちとのかねあいなどが確かめられるにいたった[宮本 1940: 315-363; 1941: 191-245]。83点(収集県率43%でそれほどたかくないが)の一部がその調査と報告のサンプルの材料としてつかわれた。

6. **衣類** 仕事着、野郎着のほか帯・前掛・たすき、はばき・けはん、足袋・手甲、それにいわゆる山袴。収集県率は75%で、山袴をのぞいてくれ手本位。それでも350点以上が集まった。山袴は二布型・四布型・六布型の3類(8種)にわけられているが[宮本 1977: 167-168], その他は資料の集まり具合も全国的でなかったし、多くの課題がのこされていた。

7. **みの・シュロ帽子** 収集県率40%あまりで決してたかい率とはいえないかもしれないが、EMの解体までにおよそ90点の標本が集まった。それをひとつのよりどころにして背みの・肩みの・胴みの・丸みの・みの帽子・腰みのの6種類の形わけが可能になった[宮本 1960b: 1380-1381]。この分野はAM以来の行き方ではワラ細工としてよりも衣食住に関する民具の一項目として、衣類のひとつとしてとりあげられていた。笠やワラの履物などにくらべて、それはまだ研究の途中にあるように思われた。

8. **わらぐつ・草履・あしなか・草鞋** AMの研究は郷土玩具から出発した。しか

し研究が本格化した1925年以降2年後には民具へ移り、いっそう人々の生活に密着した分野へと関心が変化していった。アシナカ草履の調査研究もそのひとつ。その結果は予報の形をとって『民族学研究』誌上に発表されることになった [アチック・ミュージアム 1935: 116-174; 1936a: 115-245]。こうしてアシナカを含むワラの履物はAM, EM のもっとも充実した収集資料となっていた。その数約1400, 収集県率も97.9%におよび、草履（アシナカを含む）と草鞋の収集は全国的であった。そのなかには集め手本位で集めたものが数多く含まれていた。

アシナカ調査の結果、草履には足をのせる台の作り方に平行式と交叉式の2種があり、はな緒のつけ方によって結び緒、すげ緒、なえこみの3つの形にわけられ、結び緒型が圧倒的に多いこと、それが言伝えの上からも意味をもつものだったこと、アシナカ草履の寸法の広がり（正規分布の形をとる）などが、あらためてあきらかにされることになった [アチック・ミュージアム 1936b: 182-187]⁴⁾。

わらぐつは草鞋と同じ作りのものに爪掛をとりつけた爪掛草鞋、足の甲のおおい部分を作りつけにしたスリッパと同じ形の、狭義のわらぐつ、それにさらにカカトあて部分を取りつけた浅ぐつ、長靴形の深ぐつの4つにわけられ、それぞれその広がりが確かめられていた [宮本 1966: 1168-1169]。それは民具の形わけのなかでも、とりわけ手ぎわがよいお手本だった。

草鞋はゴンス草鞋、草履草鞋、無乳草鞋、有乳草鞋（二乳、四乳、多乳）の4種にわけられるが [宮本 1966: 1167-1168]、草履・アシナカとちがひ、使いみちとのかねあい、各形式の広がりなど、おおくの問題がのこされた。

9. 下駄・竹下駄 66点、収集県率32%。草履、草鞋とともに鼻緒履物類にはいり、歯の形によって無歯下駄・有歯下駄・連歯下駄・差歯下駄の4種にわけられた [宮本 1966: 1166]。AM, EM の人たちがとりわけ注意していたように思われるのは、都会風の桐下駄や塗り下駄ではなくて、いっそう手作りの味がたけようタケ下駄やスギの連歯下駄、無歯の浜下駄、あるいは下駄の古い作り方をのこした差歯下駄の仲間だった。

10. 田下駄 田下駄は田の土をかきまぜて細かくくたく履物、または泥深い田の稲かりのとき沈まないようにはく履物。EMでは最終的に16点（収集県率26%）集めら

4) アシナカの調査にはさまざまな工夫がこらされた。アシナカの内部をX線で写したのもそのひとつだし、市川信次氏の指導で草間このえ、草間千代両氏は新潟県東頸城から長野県南佐久まで、行くさきざきで（二人はゴゼをしておられた）アシナカを集め、記録をつくってゆかれた。そのときの様子はEMの『民具標本収蔵原簿』によって知ることができる。附表3はそのとき集められたアシナカの採集年月日と収集場所とを順にならべたものである。これによって二人がたどられた道筋がわかる。この両氏の収集がEMの履物収集中もっとも密度のたかいものとなった。おそらく他の標本資料についてもそれはいえよう。

れた。そのなかには AM で注目されていた箱型やすの子型 [アチック・ミュージアム 1937: 167-168, 202-204] が含まれていた。田下駄は板型、輪かんじき型、すだれ型、すのこ型、枠型、箱型、足駄型の7種にわけられることになるが [宮本 1960a: 879-880], この民具の研究がすすむのは第2次大戦後。登呂遺跡・山木遺跡などの発掘で田下駄を思わせる遺物が多数出土したことに関連してだった。

11. **かんじき** 雪の日の履物としてのかんじきの研究は AM のアシナカ調査の路線上ですすめられた。ただそれはもはや共同研究ではなく個人の研究の形をとってのこされることになった [高橋 1942]。その結果、この民具に単輪型、複輪型、すだれ型の3つの形があり、単輪型は全体の形が円形のもの、楕円形のもの、ヒョウタン形のものがあること、それらが地方的に偏りをもちながら広がっていること、それらの形と呼び名とのつながりも確かめられた。EM のわかんじき55点 (収集県率26%, ただしわかんじき自体分布には偏りがある) もそのために役立てられた。そこには舟形をのぞくすべての形がみられた。

12. **おはぐろ道具など** AM 民具分類ではこの民具は衣食住に関するものの最後の項 (衛生保健用具) に含まれる。装身具とともに AM, EM では手うすな分野だった (収集県率は19%)。AM, EM の関心はもうすこし別のところにあった。

13. **杵・臼** 1947年から50年にかけて登呂遺跡の発掘がすすめられた。それを機に木を材料にした生活用具がにわかに関心をもたれるにいたった。EM ではたて (竪) 杵についての全国的調査がなされ、分布図・分布一覧表がつくられ [八幡 1950: 82], 形のうえから5つほどにわかれることが確かめられた。EM の杵も資料としてつかわれた。第6室では奄美諸島からおくられてきた木のみすり臼が人目をひいていた。

14. **農具** 鍬・鋤, からさお, こき箸, 草とり, 熊手, 土くれこわし, せんば, 唐箕など。142点, 収集県率53%であるが, そのうち42点は鎌, 26点は奄美・沖縄のヘラの仲間。鍬鋤については, すでに在来のわけ方があり, 農学畑のものと考えられていたのだろうか。EM ではさまざまな形のもの10本ほどが集められたにすぎなかった。ただ, 鎌については図面がつくれ, 他の機関の標本資料ともあわせて1冊の資料集成分がつけられた [宮本 1953]。この鍬鋤の分野でもまだすべきことがたくさんこされていた。

15. **蚊やり・砥石袋** 蚊やり (蚊火) は山で働く人たちなどがブヨヤカがこないようにくゆらすボロ切れなどのこと。山でつかう砥石いれの袋といっしょにして73点 (収集県率47%) が集まっていた。くれ手本位だったが, さいわいほどよくまとまったので, 他の調査ともあわせて紹介された [宮本 1947: 44-57]。

16. 鉈・鉈さや 点数26, 収集率13%。AM, EMともに手うすな分野だった。鎌と同じように鉈を扱う場合にも作りやその工程についての知識が必要になる。それらのことに研究者が興味をひかれるようになるのは、もうすこし後のことである。

17. 狩猟具 AMの人たちもまた、古いしきたりをとどめる山の人たちの暮らしに、つよくひきつけられていた。秋田県仙北郡檜木内や [高橋 1937], 新潟県岩船郡三面 [丹田 1937], 新潟県北魚沼郡湯之谷・福島県南会津郡檜枝岐・群馬県利根郡片品村 [金子 1937] については、それぞれ記録がつくられていたし、愛知県北設楽や宮崎県椎葉についても資料がよせられた。EMのこの種の資料は、その数こそすくないけれども、火薬いれや弾丸いれなど所によって形が違い、今後調べてみなければならぬとおおくの課題を示唆していた。

18. 漁具 波沢敬三氏がつくられた研究機構にはAMやEMのほか、日本常民研究所の2部門(社会経済史の研究部門と水産史研究部門)があった。AMでも薩南十島の共同調査は記念すべきものだったし、漁業技術や漁にたずさわる人の暮らしにはつねにつよい関心がはらわれた。

水産史料部門では、1938年、うけ(筥)の全国的な通信調査がおこなわれ、559通のうち24%の回答をうる好成績をおさめた。それをもとにして、うけには返し(一度はいった魚が出られなくなる仕掛)の数によって単舌式、2舌式、3舌式があり、返しが胴から自由にとりはずせる取外し型、返しが胴に編みこまれている編みこみ型、返しが縄で胴にくくりつけられている結束型があきらかになり、簧のこうけ、ざるうけ、たてうけ、うなぎ筒などのうけの形とおおのの使いみちとの対応関係が確かめられることになった [中村 1969: 6-7]。この調査は単独では未発表におわったようであるが、さきのアシナカ調査の経験がほぼそのままうけつがれていた。

EMのこの分野は360点余り。収集率60%。舟の模型からつり針・ぎじ針のサンプル、網の見本、ブツタイやタコツボなどが集まっていた。

19. 紡織用具 機(はた)、つむ、ひ、おさ、糸わく、紡ぎ車など。これもくれ手本位で130以上が集められた。収集率は49%でそれはかならずしも全国的なものではなかった。AM, EMとも基幹産業に結びつく民具の収集はそれほどすすんでいなかった。ただ登呂遺跡などの出土品とのかねあいで、つむ・ひ・おさなどがとりあげられたし、いわゆる木綿以前の織物としての麻・フジ皮・シナ・イラなどの布や衣類がつとめて集められていた。EMでは紡織技術についての手引がつくられた [宮本 1952]。アシナカのような調査はここでもみられなかった。

20. 畜産用具 ウマ・ウシの鞍、くつわ、鼻木、くつ(わらじ)など。鹿児島や岩

手の鞆をはじめ隠岐の畜産具なども集まっていた。ウマ・ウシのくつ（わらじ）はかなり多くの地方から集まっていた。最終的にそれらは130点ほど、収集県率57%にたった。過去の農山村地帯でウシやウマがはたした役割を思えばこの数は決して充分なものではなかった。

21. ふご、いずめ（いじこ）、踏篭などのワラ細工 近代産業が発展するかたわらで、日本ではワラ細工がいぜんとして重要さを失わなかった。縄・むしろなどの梱包材料は輸送部門にはかかせないものだったし、ワラ細工は副業としておおきな比重を置いていた。商品化されたワラ工品は、まえにもまして生産量が増し、全国的に規格化がすすんだ。

AMやEMのこの分野での関心は、アシナカ調査のような方向ではなく、どれほど深くワラ細工が日本の庶民生活に結びついていたかを民具の面から確かめることだった[宮本 1973: 69-75]。EMに集まったこの分野のワラ細工は70点、収集県率も38%にすぎなかったが、それでもそのワラ細工の種類を数えあげるだけで容易にそれを推しはかることができた。

ワラ細工を成りたたせている基本的技術はワラ以外の素材（アサ、イ、カラムシ、スゲ、タケ、シュロ、アケビ、ガマ等々）で編んだかご・敷物・織物・縄・うつわなどのそれと共通するものをもっている。もしそうなら、ワラ細工はいつそう広いある種の技術文化のひとつの枝わかれということが考えられる。そうした見方から、ワラ以外の素材を用いた茎皮せん維文化の構想が生まれることになった[渋沢 1960: 1]。

22. 竹筒、さしなどの竹細工 ワラ細工と同じようにタケ細工は明治以降もさかんにおこなわれた。とくに運搬具や養蚕具ではことさらに、高等小学校や実業学校ではそのための教科書がつくられ、技術の体系化がはかられた。その点もワラ細工と同じだった。AMやEMですすめられたのは、そうした技術にかかわる問題ではなく、やはりタケ細工がどれほど広く深く庶民の暮らしに結びついていたかを確認することだった[宮本 1973: 57-68]。衣食住に関する民具から信仰・行事の民具や縁起物・玩具にまで、タケ細工が多方面につかわれていることを85点（収集県率60%）の標本資料にみいだすことができた。

23. ふるい・いかき・かご 54点（収集県率30%）。置き場所の関係で前項と別にしたが、AM・EMではタケ細工の仲間として扱われていた。これらの民具が土地土地によって形や作りが異なること、それがとりあげられたのはEM以後だった。これらの標本資料には再検討しなければならない多くのことがらがのこされた。それにもかかわらずEMの標本は前項のそれとともに庶民のタケ細工の見本として充分役

立てられていた。借出し用・移動展示用の標本資料にはタケと暮らしを主題にした一群があった。

24. 背負い運搬具 背負縄、背負いかご、背負梯子、背中あてなど292点。収集県率も77%にたっていた。運搬には頭にのせる、背負う、かつぐ、かかえる、車や櫓で材木をひくなどのやり方があるが、そのなかでも背負うための民具がはやくからAMの人たちの関心をひいていた。とくに背負梯子についてアシナカと同じような全国調査がおこなわれ、この民具には荷を支えるツメと呼ばれる部分があるものとなないものがあり、おのおのアシの長さなどから大小二つの型にわかれること（無爪長型、無爪短型、有爪A型、有爪B型）、しかもおのおのが特有の地域的偏りをもって広がっていたこと。その様子からかつて無爪型が全国的にゆきわたっていたらしいこと、そこへおそらく朝鮮半島の同じ用具と結びつくりらしい有爪A型が九州を中心にひろがり、ついでB型が瀬戸内そのほかに普及したらしいこと。この民具に対する地方的呼び方もそれに係わりをもつらしいことなどが推測されるにいたった〔儀具1938: 271-340〕。それはAM以来の民具研究が到達したもっとも注目すべき研究のひとつだった。

1949年、EMの仕事として運搬方法と運搬具についての全国的な調査がおこなわれ、運搬法の地域的偏り、その方法に対するその土地での呼び方、民具との結びつき、暮らしとのかねあいがあきらかにされた〔宮本 1949〕。これらの調査をもとにして指定申請が出され、標本資料のうちから選出された62点が1955年に国指定の重要民俗資料（現在は重要有形民俗文化財）となった。それは国の重要民俗資料指定のかわきりとなった。

背負梯子や背負いかご以外についての分析は後にのこされた。

25. こだし、てご タケの小さなかご、ざる、タケ以外のイタヤカエデやヒノキの編みかご、つる細工やスゲの編みかごなど。130点（収集県率66%）。一部は前項のタケ細工。また背負運搬具に結びつく。

26. 櫓、ネコ車 雪のための櫓、肥料を運ぶための櫓、瀬戸内のネコ車など15点。くれ手本位で集まったものだった。この分野での研究はほとんど手つかずのようだった。櫓のひきつなには珍しいのがみられた。

27. 天秤棒 かごなどを両端にさげる天秤棒、それに棒の両端をとがらせ、そこにムギたばや薪などをさして運ぶおうご、普通の天秤棒とは逆に反りかえっている伊豆新島のソリテンビンなど。EMでは運搬具の一部として、つとめていろいろな形のものが集められた。

28. 信仰・行事用具 AM 形成期の1932年に発表された文献には民具を5分野にわけ、その第一に信仰生活を対象とする造型物があげられていた[宮本 1972: 956-958]⁵⁾。その項目はAM 民具分類(附表1)とは配列順序がすこしちがうだけ。项目的にはAM 民具分類ではあらたに祈願品の項がたてられた。

この分野もまたくれ手本位で集められたが、三河の花祭をはじめ、各地の正月・小正月、盆行事などの民具420点(収集県率83%)を集め、民具の全分野のうちもっともはやく妥当な分類にたどりつくことができた。

そのなかには削掛やワラ馬・チガヤ馬、しめ飾のまとまりや、珍しい祭供具などもみることができた。そのうち、おしらさま33体については図録がつくられ、詳しい記録がのこされた[日本常民文化研究所 1943]。それは民具としてのおしらさまを形態学的・解剖学的に記載し「その全貌及び特定の文化基盤を把握する大きな手がかりをえんとした」ものだった[宮本 1972: 965]。そこにもアシナカ調査のひとつの流れがあった。しかし、この分野の民具をひとつずつ形わけし呼び方や地域的広がりとかねあいをもとめる仕事は、後のこととしてのこされた。

1955年2月、おしらさま33体が国の重要民俗資料(現在重要有形民俗文化財)に指定された。それはAM, EM を代表する民具のひとつとなった。

29. 凧, 羽子板, こまなど 64点。収集県率26%。まだAM の収集が全国化しない時期に集められたものが多いようだった。

30. 笛 31点。収集県率13%。ハト笛などを含む。楽器はAM 民具分類では信仰・行事に関するものなかの四番目にひとまとめにされている。また一部は分類の最後の分野の縁起物・玩具のところに含まれる。置き場との関係で表1では独立の1項となってしまうが。

31. 人形など 郷土玩具, 縁起物(縁起を祝うために飾るだるま, はま矢の類)の大部分がここに含まれる。点数380余り。収集県率は89%でひろく各地から集められた。

すでにのべたようにAM の民具研究はこの分野の研究から出発した。その時期の研究のすすめ方は後のAM の民具研究におおきな経験となったが、1930年前後からは研究上の関心がこの分野に再びもどることはなかったといつてよい。点数・内容ともかなり達していたが、それは民具研究のなかではほとんど忘れられた分野として

5) 1930年、AM では早川孝太郎氏を中心に『蒐集物目安』という民具収集の手引きをつくり協力者、有志者におくって全国的に民具の収集・調査を展開しようとした。それは2年後発行された小野武夫博士の『郷土経済史研究提要』におさめられ、「土俗品蒐集の要領」として全文引用され社会経済史の領域でもたかく評価されることになったという[宮本 1972: 956]。しかし民具と経済史とのつながりは発展しなかった。

とりのこされることになった。

何故そうなったか。ひとつには AM, EM の外で、郷土玩具を集め研究する人たちがふえ、ひとつの領域をもつにいたったことがある。また、AM, EM の研究がすすむとともに、この分野はそれとはなじまない何かをもつことに多くの人たちが気づきはじめたからなのだろうか。この分野を扱うには別の工夫がいるかもしれない。

Ⅳ．課 題

1. 1930年代のはじめには、AM の人たちは民具についてその概念とだいたいの輪郭とをはっきり確定することができた。民具は AM で生みだされた新しい言葉だった。

2. しかし AM や EM では、けっして民具の全分野が同時平行的にとりあげられたわけではなかったし、そのとりあげ方には AM らしさがただよっていた。

AM が集め、研究の対象としようとしていたのは、アシナカ草履のような当時としてはけっして珍しくない、きわめて日常的な暮らしの民具、しかも全国的に広くその仲間が見つかるような普通の民具だった。

AM 流の行き方では民具そのものが最終的な目的ではなく、それはあくまでも文化の理法を知り、庶民の（たぶん大正的な言い方をすれば民間の）暮らしの移りゆきを推しはかるひとつの手だてにしかすぎなかった。

しかし、そのためにも、ともかく民具をいわば形態学的に、あるいは解剖学的ともいえるような厳密なやり方で記載してゆくことが、いっぽうの土台となると考えられた。もういっぽうの土台は、いうまでもなく全国的な質問紙法による調査で、それによってその民具の形や広がり方、呼び名や言い伝えとのつながりなどが確かめられた。

3. AM, EM の標本資料を EM 最末期の資料所在簿によってわけると31ほどの分野にわかれ、分野によって集められた資料の点数や集められた収集地の広がりにおおきなちがひがあることが数の上で確かめられた。

4. それを AM, EM 内部の研究と重ねあわせてみると、およそ3つの行き方がみられる。ひとつはアシナカの研究のように全国的にその様子がわかり、形わけや呼び名の型、それらの結びつきや広がりなどをあきらかにする行き方。笠、山袴、ワラの履物、下駄、かんじき、たて杵、蚊火、うけ、背負梯子などがそれである。もうひとつはここでとりあげたワラ細工やタケ細工、食器・台所用具、衣類、漁具、信仰・行事用具のように、その分野に属する民具のひとつひとつにまでは研究はおよばなかつ

たが、むしろその分野に含まれる民具の全体としての大枠を確かめることによって、それがどれほど日本人の暮らしに大切な役割をはたしてきたか、その大筋をつかむ行き方である。このほかに鎌や鉋、紡織具、農具、畜産具、櫓・ネコ車、凧・羽子板・こま、人形そのほかのように、ほとんど手つかずのままのこされたものがある。

5. 新しいみちをひらく方法として、それまでを肯定的にうけとめ、やがてそれをのりこえるやり方がよいという。もしそうなら、AM, EM のやり方とのこされた標本資料を出発点として考えなおしてみてもよいのではなかろうか⁶⁾。

文 献

アチック・ミュージアム

- 1935 「所謂足半（あしなか）に就いて（予報1）」『民族学研究』1（4）：116-174。
 1936 a 「所謂足半（あしなか）に就いて（予報2）」『民族学研究』2（1）：115-245。
 1936 b 『民具蒐集調査要目』アチック・ミュージアム。
 1937 『民具問答集』第1輯アチック・ミュージアム。

磯貝 勇

- 1938 『背負梯子について（予報）』『民族学年報』1：271-340。

金子総平

- 1937 『南会津北魚沼地方に於ける熊狩雑記』アチック・ミュージアム。

宮本馨太郎

- 1940 「我国現行の笠について」『民族学年報』2：315-363。
 1941 「我国現行の笠について」『民族学年報』3：191-245。
 1947 「蚊火」『民族学研究』12（2）：44-57。
 1949 『本邦在来の運搬方法（予報）』財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（以下EM）。
 1952 『紡織技術』EM。
 1953 『鎌図集』EM。
 1960a 「たげた（田下駄）」財団法人日本民族学協会編『日本社会民俗辞典第2巻』誠文堂新光社，pp. 879-880。
 1960b 「みの（蓑）」財団法人日本民族学協会編『日本社会民俗辞典第4巻』誠文堂新光社，pp. 1379-1381。
 1964 『灯火——その種類と変遷』六人社。
 1966 「はきもの（履物）」財団法人日本民族学協会編『日本社会民俗辞典第3巻』誠文堂新光社，pp. 1166-1169。
 1972 「第1巻民具篇解説」日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書第1巻民具篇』三一書房，pp. 955-974。
 1973 『民具入門』慶友社。
 1977 『民具研究の軌跡』柏書房。

中村俊亀智

- 1969 「うけ（笠）」『文部省史料館報』9：6-7。

6) AM, EM とも集められた標本資料を多くの人たちに利用してもらう体制は、とてもとれなかった。内部の人でもそれにはかなりのむずかしさがともなった。文部省史料館の場合にも年かかさのふるい資料を安全に保管すること自体に多くの未解決の問題があった。民具の保存管理の技術はほとんどすすんでいなかった。しかしこれからは、民博の時代にきて、状況は変わるのではなかろうか。

日本常民文化研究所

1943 『おしらさま図録』 日本常民文化研究所。

渋沢敬三

1960 「我国のワラ文化」『図説世界文化史大系』月報 21: 1。

高橋文太郎

1937 『秋田マタギ資料』 アチック・ミュージアム。

1939 「木地屋文書並に工具」『民族学研究』5 (2): 28-43。

1942 『輪樑 (わかんじき)』 日本常民文化研究所。

丹田二郎

1937 『越後三面村布部郷土誌』 アチック・ミュージアム。

八幡一郎

1947 「日本古代の堅杵」『民族学研究』12 (2): 102-106。

1950 「堅杵分布図の作成について」『民族学研究』15(1): 82。

附表1 EM 収集標本資料による AM 民具分類⁷⁾

10 衣食住に関するもの

- 11 家具 (室内器具, 寝具, 保存用具などを含む) ござ, 灰かき, 灰ざら, 箱, 箱まくら, 花立, はしご, 火かき, ほうき, 踏台, 衣裳かご, 鏡箱, かぎ, かま敷き, (かまど), 唐びつ, 木まくら, こも, こたつ, くま手, まこの手, まくら, ねこ箱, ねずみとり, ねずみよけ, 裁縫道具入れ, 紙帳, しびん, 敷物, 寝具, たらい, ちり箱, ちり取り, つい立て, 机, つるべ, つづら, うちわ, わら円座, わらほうき, わらふた, 雪かき, 自在かぎ。
- 12 灯火 (照明) 用具 油いれ, 油つぼ, 油つき, 明り, 明り台, 行どん, 絵ろうそく, がん灯, 火台, 火切り, 火打ち, 火打道具, 火打箱, 火打袋, 火打石, 火打がま, 火打かね, 火口, かがり台, 箱, カンテラ, ランプ, 松明し台, 松明しかご, 松やにろうそく, ちょうちん, ろうそく, ろうそく台, ろうそく立て, ろうそく入れ, しで, しょく台, たいまつ, 竹明り, 短けい, 手しょく, 灯明台, 灯明ざら, 灯火台, 灯火具, 灯ろう, 付木, ちょうちん。
- 13 調理用具 油いれ, 油しぼり, つぼ, 弁慶, いづめ, わらさら, はし, はし入れ, 火吹竹, ひきうす, ひしゃく, ほう丁, ふるい, いかき, 石うす, かご, 貝びしゃく, 貝焼, 貝焼台, 貝焼ざら, かま (釜), (かまど), かめ, 皮むき, 木ばち, 木ふね, 木ざら, きね, 米すくい, こも, こしき, こしきの輪, くし, くし入れ, 豆すくい, まな板, 升, ませ棒, めんば, 飯入れ, 飯かご, 味そこし, 味そつき棒, 水入れ, 水くみ, 水筒, もり手, もち入れ, もちむし,

7) この表は EM『民具標本所在簿』の内訳を補うものとして EM『民具標本収蔵原簿』から作成したものである。同原簿には一般につかわれている (または, つかわれるであろう) 民具の名前を記入する標準名の欄が設けられているが, ここではその記載をもとにして 1 番から 10,000 番までのものから書き出した。ただしやすく実体が思いうかばないような難しい名前や正確さをかく名前は適当に書きかえ, 名前のないものには記憶によってなるべく名前をつけてみた。名前の書き方は『新明解国語辞典』第二版のそれを参考にした。名前はひとつの民具でひとつだけにした。これをもとにして AM 民具分類 (AM『民具蒐集調査要目』1936) をたよりにして, そこにみえる民具の一般的な名前をわけてみた。ひとつの名前の分類はひとつ限りにし, 同類異名の場合も省略しないで, おおむね ABC 順で配列した。同分類中一部この作業に適切でないものは読みかえた。原簿には民具とはいえないもの, たとえば施設設備や用品 (原料・材料) の類が含まれている。施設設備は () のなかに入れ, 内容を改めて定義することが必要なもの, たとえばひとつの地方での呼び名を一般の名前化することが必要であるようなもの, 分類が 2 項目以上にまたがり, なお調整について研究する必要があるようなものについては * によって区別した。このようなものを手掛りに, さらに民具の細かい分類や民具の字引きなどを考えてみたらどうだろう。縁起物・郷土玩具については改めて検討したい。

なべ、なべのふた、なべ持ち、なべ敷き、なべ取り、なっとうつと、肉切りほう丁、肉入れ、肉入れかご、布袋(ぬのぶくろ)、おはち、おひつ入れ、おけ、おろし、料理台、魚あぶり、酒入れ、酒つぼ、酒こしかご、さな、さら、さら入れ、ささら、さと芋おろし、さじ、せいろう、塩入れ、塩かご*、塩おけ、そばあげ、そばすくい、そば切りほう丁、水筒、すの子、すり粉木、しゃく子、竹容器、たわし、手きね、鉄がま、鉄びん、豆ふ箱、つぼ、つぼのふた、つち、つと、うどんあげ、うろこ取り、うす、くし、ざる。

14 飲食用具(茶道具・煙草道具を含む) あわ飯かご、弁当箱、弁当袋、弁当入れ、盆、台、ご器、箱ぜん、はし、はしかご、はし入れ、弁当入れ、ひしゃく、ひょうたん、印ろう、かご、片口、木ばち、木ざら、きせる、木地盆、木地ざら、木地わん、木地ぜん、行り、果物入れ、くるみぜん、めんば、飯びつ、水入れ、もち入れ、おひつ、おひつのふた、おけ、おかず入れ、杯、杯台、酒入れ、さら、さじ、さじ入れ、さじかご、真ちゅう盆、真ちゅうカップ、真ちゅう茶わん、スプーン、水筒、しゃく子、煙草、煙草盆、煙草入れ、煙草切りほう丁、煙草切り台、煙草刻、煙草おけ、食べ物入れ、つぐら、筒、茶入れ、茶おけ、茶たる、茶つば、茶せん、茶筒、茶わん、わん、わんのふた、わらさら、やに取り、よう枝、湯とう、ぜん、ぜん箱。

15 服物*(履物を除く) あさ、あさの着物、あさ布、あせどめ、足飾り、あし、帽子、袋、え紋掛、ごご帽子、はばき、はかま、花祭衣裳、半てん、羽織、法被、腹当て、晴着、針山、はち巻、服飾り、風ろ敷、入れ物、祝着、かぶり物、かかと当て、紙子、紙布、かみしも、冠、雨合羽、かさ、かさの台、肩掛、脚はん、けさ、着ごご、着物、布地、綿、婚礼服、婚礼冠、婚礼着物、甲掛、腰当て、腰みの、首巻、草取面、くつ、まだ布、前当て、前掛、目当て、みの、みの帽子、みのすげ、喪服、もも引、胸当て、頭きん、布、帯、背中当、スカート、すね当て、シュロ帽子、足袋、たすき、手袋、手甲、手ぬぐい、つま掛、つむぎ、わら手袋、山麻、山ばかま。

16 履物 足だ、あしなか、げた、履物、鼻緒、踏俵、かかと当て、かんじき、皮くつ、木くつ、くつ、桶くつ、スキー、滑りげた、滑り草履、田げた、竹げた、つま掛、わらぐつ、わらじ、雪げた、草履。

17 装身具(文身道具を含む) 油入れ、足飾り、きんま入れ、はけ、箱、針入れ、入墨針、入墨小刀、鏡、髪飾、かんざし、毛うけ板、毛抜、木くし、こうがい、首飾、首飾入れ、くし、くし箱、ピン、財布、石灰入れ、扇子、鈴、竹くし、トンボ玉、腕輪、扇、指ぬき。

18 出産・育児用具 いづめ(いじこ、えじこ、つぐら)*、育児かご、海草(いづめに入れる)、きなきな、おしゃぶり、産着、揺かご。

19 衛生・保健用具 五倍子、髪洗粉、木うす、きぬた、お歯黒つぼ、さいかち、石灰入れ、捨木。

20 生産に関するもの

21 農具 あふ除け、あわ袋、あわ刈機、棒、脱穀機、脱穀つち、どろ除け、葉打ち、へら、ほうき、掘棒、掘りへら*、ふるい、稲こき、稲刈がま、蚊やり、かご、蚕箱、かま(鎌)、かんびょうむき、からさお、からすき、皮むき、土うす、きね、こきばし、くま手、くれ打ち、草かき、草取り、くわ、くわ柄、馬ぐわ、まぶし織、豆こき、豆たたき、豆ぐわ(鍬)、升、まとり*、み、もみほし、もみこき、もみまき、もみふるい、麦こき、麦打ち、麦打棒、麦焼棒、苗入れ、苗代ごて、鳴子、なわとおし、のこぎりがま、農具、農機具模型、漏斗、差し、せんばこき、シャベル、すき(鋤)、すきの刃、すりうす、筋切り、田げた*、(蔵)、田かき車、種入れ、俵、扇、つえ、つち、土掘り、土かき、うす、うすの棒、養蚕用具、指はめ。

22 山樵用具 編袋、箱、かま、かまのさや、刀、皮むき、草取り、くさび、くさび入れ、なた、なた袋、なたのさや、のこぎり、布袋、おの、手かま、と石、と石台、と石袋、と石入れ、や(くさび)、山なた、やすり、やすり入れ、よき。

23 狩猟具 胴着、道具入れ、柄袋、煙硝入れ、火なわ、火なわ入れ、火なわたたき、火なわ

- 銃、火口入れ、火薬入れ、きじ笛、小刀、(小鳥わな)、くま狩槍、(わな)、しか笛、(しかわな)、しか皮着、仕掛鉄砲、足袋、玉入れ、裁着(たちぎ)、鉄砲、(鳥わな)、(うさぎわな)、(わな)、矢、矢ばさみ、矢筒、山刀、やり。
- 24 漁具 網針入れ、あか取り、明り、網針、網、編袋、網いわ、網すべ、編みつち、編みわく、網針筒、あさり取り、あわび取りのかぎ、びん(瓶)、ふりかぎ、ぶったい*、道具箱、道具箱入れ、どじょうかご、どじょううけ、えび網、えびいけす、えび入れ、ガス灯、擬じ針、漁具、漁業旗、はえなわ、浜箱、版木、針、針入れ、針さび落し、はさみ、旗、はち、ほうき、ほう丁、掘棒、船旗、いかかぎ、いかつの、いかつり、いかつり針、いかり、いかつりかぎ、生す、いそなわ、いそのみ、糸巻、糸より、糸より器、祝着物、いわし取り、かがり、かぎ、かぎ箱、かぎ入れ、かぎみがき、かご、かい掘り、海草取り、かきばさみ、かきかぎ、かき打ち、かめ、かみ取り、鑑札、かせ、滑車、かすみ、肩当て、かつお取り、かつおつり、かわはぎ取り、けた(桁)、小刀、ころばし*、鯨ほう丁、前当て、まぐるつり針、まきえ、まきえ入れ、升、ますつり、眼鏡、もり、名札、流し針、なた、なわ、のぼり、のり下た、のりぼう丁、のり干し、のりふね、のりかご、のりけた、のりしび、のりす、のりわく、のり切台、のりこし箱、おけ、おき網、沖箱、重り、おとり入れ、さぐり、魚干し、魚かぎ、魚かご、魚筒、さお、刺網、さすまた、ささえ取り、せいろう、しびぬき、塩入れ、しじみ取り、測量なわ、す編台、す編つち、す針、水深計、すし箱、しゃく子、たいつり針、たいまつかご、大漁旗、大漁飾、たこ取り、たこつば、たこつり、たも網、たる、たち魚かぎ、天草取り、飛魚網、とま、とり金、つり道具、つり針、つりの重り、つりさお、つり針入れ、つり糸わく、うかいなわ、うけ、うなぎかご、うなぎ取り、うなぎ筒、うなぎうけ、わかめがま、わかめ取り、わき当て、わらすべ、やす、より掛、地引網、地引旗、地引の振板。
- 25 紡織・色染具 あいつききね、あいつきうす、編み棒、あさ(麻)、あさ巻、あさ緒、あさより、あさの皮はぎ台、あし掛、あや棒、あや掛、あぜ、ばしょう、から巻き、機(はた)、機道具、機腰板、機巻取、機帯、機織管、ひ、ふじ(藤)皮、ふじ緒、糸巻、糸、糸引き、糸車、糸取り、糸わく、糸わく台、糸よせ、糸繰り台、糸操器、糸操車、糸より車、かご、かごわく、かせ掛、型紙、皮はぎ、こきばし、管、くず綿、まね木、ま綿、木綿糸、中筒、布、お、お巻、帯織、おけ、重り、おさ、おうみかご、おうみおけ、しま帳、伸子、手代、手代木、錘(つむ)、錘台、紡ぎ車、わく、綿繰り、綿繰器、綿打ち、綿弓、綿打刀、綿打つち、指ぬき、座繰機、座繰わく、地機。
- 26 畜産用具 あふみ、伯楽ばさみ、鼻輪、鼻輪当て、腹当て、首掛、くら、くら敷、口当て、くつわ、むち、荷繰りなわ、面がい、尻かい、鈴、手綱、馬のくら、馬のくら敷、馬のくつ、耳袋、馬帯、馬のわらじ、牛なわ、牛鼻出、牛鼻ぐり、牛首当て、牛のくら、牛のくら敷き、牛のくつ、牛みの、牛の面がい、牛の背当て、牛の鈴、牛輪、牛のわらじ。
- 27 交易用具(金融関係を含む) はかり、箱、札、袋、船じるし、勘定札、小判入れ、升、繭はかり、財布、刺し、銭箱、銭型、銭升、そろ盤、仲馬鑑札、銭袋、銭かご。
- 28 その他 編台、土器作り道具、ござ機、ござ織ひ、刃物、はなかき小刀、はっぱたがね、札、ふいご、板へぎぼう丁、板削り、繭網、紙たたき、瓦型、瓦切金、瓦みがきへら、瓦みがきのこて、瓦たたき、木針、木ふね、木型、きね、きぬた、釘、桑もぎ、舞きり、万能、みの作り、むしろ編、むしろ針、むしろ機、なた、なわより、のこぎり、のみ、緒とおし、おけ、おろし、ろう、ろう型、せん、墨つば、墨つば入れ、たたき棒、たたき板、手板箱、つば、つり針作り、つち、うるしかき、うるしおけ、うすの目立て、わらすぐり、わらたたき、わらぐつの型、わらしべ取り、わらじ編、わらじ編台、わらじの型、屋根ふきへら、屋根ふき針、つま掛の型。
- 30 通信・運搬に関するもの
あか取り、編袋、弁当袋、弁当入れ、弁当かご*、カヌー、道具かご、柄かご、えびかご*、ゴ

ンドラ、船の模型、箱、白土かご、船、引きつな、ほら、ほら貝、ふご、袋、いかり、芋かご、いそかご、かご、かい、かます、肩当て*、皮船、肥船、米かご、米包、腰当て、腰かご、腰さげ、くりぶね、車、車のひきつな、草刈袋、巻きかご、巻輪、豆入れかご、水くみ、水切かご*、もっこ、なわ、荷なわ、肉入れかご*、ぬかかご、布袋、緒、おけ、おうご、魚かご、さん俵、背中当、千石船、銭箱*、背負はしご、背負袋、背負板、背負かご、背負なわ、背負布、塩かご*、そり、そりのひき綱、そりの模型、水牛車、竹かご、卵入れ、種入れ*、たにしかご*、たる、俵、手かご、天びん棒、天びんかご、手さげ、手さげふご、手さげ袋、手さげかご、つえ、つりかご、つづら*、茶入れ、う飼舟、巻輪、わらふご、わら袋、わらかご、わらなわ、わらづと、野菜入れ、野菜かご、ざる。

40 社会生活に関するもの

日よけ頭きん、水おけ、とび口、消防扇、わらさん(算)。

50 儀礼に関するもの

真田帯、誕生祝、とし祝、ひも、ひしゃく、袋、かさ、片口、きゃほん、背負なわ。

60 信仰・行事に関するもの

61 偶像 愛宕さま、大黒さま、恵比すさま、ご神体、船霊さま、石仏、石地藏、蚕神、掛絵、くま手守り、まいご札、まこも馬、守り袋、面守り、水塔婆、木像、のしがみさま、お札、おくないさま、お守り、神像、精霊船、わら人形、わら馬、山神、やまづみさま。

62 幣帛類 あわ穂ひえ穂、御幣、しめ飾り、はな、奉納旗、奉納のぼり、いなう inau、祝棒、祝しめ、かぶら矢、削掛、くし、万灯、繭玉、のぼり、おみきのすず、しめ飾り、しめなわ、輪飾、割木。

63 祭供品・供物 土器、えぶり、ご器、はし、奉納くわ(鍬)、奉納竹筒、福俵、ひょうたん、神のおし敷、神のぜん、清めおけ、草刈がま、馬くわ、目さら、もち筒、おけ、おみきのつば、お塩とり、線香、お金、神せん、ぜん、灯明さら、とし神さら、つと、わらさら、わらづと、やす、結びわら。

64 楽器(信仰・行事以外のものも含む) ばち、でんでん太鼓、鼻笛、はと笛、笛、太鼓、振太鼓、風琴、かえる笛、鐘、胡弓、口琴、豆太鼓、みみずく笛、木魚、ねこ笛、人形笛、鬼笛、ラッパ、さい配、せみ笛、しし笛、しょう、しゅ木、竹笛、とら笛、鳥笛、鼓(つづみ)、うさぎ笛、うそ笛、弓琴、陣太鼓、じゃ味線。

65 仮面 大黒面、恵比す面、五郎面、花見面、面、ひょっとこ面、神面、からす天ぐ面、金太郎面、きつね面、味ぬり面、武者面、お福面、うさぎの面、塩吹面、しし頭、しょうきさま、天ぐ面、天神さま、土面、やっこ面。

66 呪具* あしなか、まじないばと、ひいら木、ひょうたん、いわしの頭、魔除け、祈とう箱、桑ひょうたん、みかん、つば。

67 ト具 かゆかき棒。

68 祈願品 絵馬、版木、花矢、奉納きぬた、奉納鳥居、奉納剣、羽子板、ひしゃく、箱、石、かま(鎌)、きつね、縫いぐるみ、布、経、さる、竹、太刀、弓矢、いのこ、いのこ打ち、へび、いづめ、もち、刀、奉納札、升、しゃくし、わらじ、よだれ掛。

69 その他 ぼん天、棒、花祭のまさかり、ほこ、なまはげのほう丁、木太刀、小刀、経筒、みこし、なぎなた、りゅう頭、ちょうちん、線香、すり粉木、鈴、しゃくし、しゅ木、たいまつ、かさ、数珠。

70 娯楽・遊戯に関するもの*

ばいごま、別府たまげた、びい玉、坊主こま、ぶんどま、ぶんぶんどま、文房具、ブリキこま、

ぶっつけこま, だるまたこ, 伝信遊び, 切符, 絵すご六, 絵だこ, 絵葉書, 煙硝, がん具, からすおはじき, 銀行遊び, ゴムほうずき, ゴム風船, 豪傑ごま, 軍事遊び, 軍人合せ, 羽子板, 箱根細工, 箱庭道具, 花ごま, 花玉, 花形紙, 羽(はね), 針金鉄砲, 旗こま, はと, へび, 日がさ, 飛行機, 飛行機だこ, 星たこ, 吹矢, 覆面, 福助たこ, 服飾がん具, 福笑い, 船, 風車太鼓, 百人一首, ひょうたん, いろはかるた, 色板, 石投げ, 石けり, 板すもう, 板馬, 影絵, 貝がん具, 貝合せ, かけごま, かけさら, 紙風船, 紙面こ, 紙ピストル, 紙ラッパ, 紙テープ, 紙鉄砲, かんしゃく玉, 唐子, 刀, 変りびょう風, 風車, けん玉, 肩章, 木こま, 金ぶち眼鏡, 金太郎たこ, 汽車遊び, 汽車切符, 切手, きつねたこ, きじ車, こま, こまなわ, こま打棒, 首飾, 勲章, 曲こま, 経木真田, 巻たこ, 豆鉄砲, 万灯, まり, マスク, 松川船, 面こ, 水眼鏡, 水写真, 水鉄砲, 鉛面こ, ならしたこ, 鳴りこ, なわ飛のなわ, 根木, 人形, 人形たこ, 人形合せ, 上り下り車, のぞき眼鏡, お花こま, おはじき, 起き上り, 起き上りおかめ, 起き上りしし, 起き上り小ぼう師, おもちゃかご, 扇たこ, 折紙, 押こま, お手玉, パチンコ, ピストル, ラヂオ, レンズ, ろう面こ, ろう石, さいころ, 西洋将棋, せみたこ, すご六, 摺絵, すりばちごま, 将棋盤, 竹鉄砲, 竹とんぼ, 竹馬, 竹の葉船, たこ, たこ絵, たこ糸, たかきごま, 手まり, 手品がん具, 知恵組木, 知恵の輪, 地球ごま, 千代紙, とび口, とんびだこ, とんぼ, とんぼごま, とんぼだこ, 飛んだり踏ねたり, 東海道すご六, 唐人だこ, 唐人鉄砲, とら車, 鳥船, つばめ, つぎ足つえ, 土面こ, つづら, ちょう, たこ, たて, 腕時計, 海ほうずき, うなり, 雲竜たこ, 映し絵, うず巻ごま, やっこだこ, 山吹鉄砲, や次郎兵衛, 呼子, 郵便遊び, 銭ごま, 磁石, じゃんけん紙。

80 縁起物・郷土玩具 (省略)

附表2 旧財団法人日本民族学協会附属民族学博物館『民具標本所在簿』の内容⁸⁾

第5室		くし, 首飾…… (台湾)	7
501	弓矢, 弩, 皮ぐつ……(中国東北地方)	みの, くし	19
	シナ皮, ブドウつる……	509 腰みの, 水筒 (ミクロネシア)	20
502	つえ, もり先, 箱……(南サハリン)	510 木ばち, つり針, ぎじ針……(ミクロネシア)	50
503	木さら, わん, へら……(南サハリン)	511 貝斧, きね, 鍋……(ミクロネシア)	25
		512 木ばち, さら (ミクロネシア)	15
504	皮ぐつ, わかんじき, 皮袋, 耳飾……(南サハリン)	513 凧(中国4, 朝鮮半島2などを含む)	37
505	編袋, 礼冠, 背負なわ, イナウ, 酒箸……	514 矢筒, 酒箸, 弓, 矢, 小刀 (サハリン13を含む)	58
506	わん, ぜん	515 耳飾, 飯アワのたね, 餅アワのたね…… (台湾)	34
507	木ばち, タバ…… (ミクロネシア)	わらじ (中国)	10
508	貝貨, みの, 首飾……(ミクロネシア)	517 木さら (ミクロネシア)	12
		518 木ばち, ひしゃく (うちミクロネシア)	

8) ここでは第2室(漁具室), 第5室, 第6室の部分を書きだした。第1欄は箱番号, 第2欄は箱の内容, 第3欄はその箱にいれられている標本資料の件数, ……はその他, とくにカッコ内でことわらないもの以外は国内資料を示す。植動物の名と呼び名(方言)は片仮名であらわした。見出しの書き方は『新明解国語辞典』第二版の表現を参考にした。第1欄で5東, 6西などであるのは置き場所が第5室東側の壁のあたり, 第6室西側の壁のあたりにあったことを示す。

5, 台湾2, 朝鮮半島2)	18	548 草履, わらじ	55
519 なた, 草かき, こき箸, すりこぎ……	31	背負なわ	38
520 削掛, おみきのつば, かゆかき棒……	115	549 かんじき	55
521 と石袋, なたのさや, 墨つば, 蚊やり, 火薬いれ……	73	田げた	11
522 アワ穂ヒエ穂, 削花, わらさら……	161	550 わらぐつ	81
523 苗代こて, なた, くわ, 土掘り……(う ち朝鮮半島2)	42	草履	6
524 張子馬, 牛, はま弓	23	551 わらぐつ, つまかけわらじ	37
525 円座, まんじゅう笠, すげ笠 ……(朝鮮半島)	11	552 わらじ(うち中国など2)	84
526 おはぐるつば, くし, かんざし……	35	553 つまかけわらじ, わらくつ	61
煙草いれ, 火打石, きせる入れ, 捨木	38	554 草履	132
527 腕輪, 首飾(ミクロネシア)	25	555 下た, 滑りげた, 竹げた	66
528 なまはげの面……	10	556 わらぐつ	28
529 瓦製造用のへら・木型……	10	557 草履(あしなか)	130
530 うどんあげ, 奉納鳥居……	24	558 草履(あしなか)	128
531 ふるい, み, 喪帽……(朝鮮半島)	34	559 草履(あしなか)	140
532 くし, 鏡箱, わらじ……(朝鮮半島)	56	560 草履(あしなか)	139
533 きせる, ほう丁, 煙草入れ……(朝鮮 半島)	23	561 わらぐつの型	25
534 わらじ(朝鮮半島)	27	田げた	6
535 くわ, かま, しゃく子……(朝鮮半島)	18	562 かご, くし, 刀(バリ, セレベス, ジ ャワ)	29
536 木くつ, くつ(朝鮮半島)	17	563 草履(あしなか)	155
537 おけ, まくら, たらい, 豆ふ箱, さら ……	28	564 帯, 前掛, 弁当袋, 着物	71
538 そろばん, 木はち, ぜん, 湯とう, な べ取り……	104	565 けはん, ふろ敷, 着物	45
539 のりす, のりざる	4	566 前掛, 足袋, はばき……	45
540 めんば, 弁当行き, わん, 木地盆…… (うち朝鮮半島2)	68	567 かご, 面……(ジャワ, セレベス)	11
541 ぜん	4	568 首飾, わん, 木の葉のさら(バリ, スマ トラ)	23
542 しゃく子	39	569 帯, けはん, 頭きん, 手甲, たすき, 手ぬぐい	69
なべ取り	21	570 帯, 手甲, 仕事着	28
すり粉木	5	571 前掛, 仕事着, 山はかま	37
543 かさ(うち台湾2)	66	572 仕事着	20
544 牛のくつ, 馬のくつ, くつわ……	65	5東 わらぐつ, 草履	46
545 牛のくら, 鼻ぐし, 手綱	35	背負かご	11
546 牛のくつ, 馬のくつ	26	自在かぎ	9
つま掛わらじ, わらじ, わらくつ	48	そり, ねこ車, 竹スキー(うちサハリ ン2)	15
547 はばき, 脚はん	36	滑り板……(うちジャワ5)	10
背負なわ	4	5西 みの	51
		5南 自在かぎ, 掛けかぎ	12
		草履(あしなか)	67
		絵馬	10
		天びん棒	9
		石うす, 奉納額	3
		石像	3
		機(地機)	2

だるま	2	621	いづめ(いじこ), ふご, 踏俵	11
5北 背負はしご, 背中当(うち朝鮮半島1)	40	622	編袋, 腰かご, 手かご……(うち朝鮮半島1)	25
つむ, 綿くり器	3	623	かご, 腰かご, 火打かね, 付木……(うち朝鮮半島2)	71
帽子, わん, 衣類(中国チャハル・綏遠地方)	43	624	あんどん, ちょうちん, ランプ(うち朝鮮半島3)	44
さじ, 木ばち(うちサハリン8)	9	625	ひしゃく, しめ飾り, わらつと, モグ ラ打ち棒……(うち朝鮮半島2)	46
郷土玩具	30	626	つむ, 糸わく, 手木	9
草履, わらじ	11	627	つむ, 糸つむぎ, 蚕網……	16
だるま	30	628	わらつと, ワラウマ, しめ飾り	41
こけし, 姉さま人形……	32	629	つむ, お(芋)うみおけ, 手代木……	90
火薬入れ, 手袋, 皮足袋……	22	630	紡ぎ車, 糸わく(うち朝鮮半島1)	18
背負はしご(朝鮮半島)	2	631	ふご, 背中当……(うち朝鮮半島1)	30
草履	17		手かご, 編袋	19
土うす, からうす, からすき(朝鮮半島)	3		羽子板	12
わら手袋	3		ウマのかしら, 獅子かしら	28
第6室		632	わら馬, 精霊ふね, わらさら	30
601 背負かご, かご, 苗かご……(うち朝鮮半島1)	15	633	ふご, さらつぐら	4
602 びく, 茶わんかご, 魚かご	27	634	なべ敷き, ほうき……(うち朝鮮半島3)	30
603 かご, 手かご……	38	635	いづめ, ヨイサー(かご)	6
604 ふるい, バラ, いかき……	21	636	いづめ, くわ, 米つきの輪……	19
605 かご, 塩かご(うち朝鮮半島1)	29	6東	タケ(植物標本)	3
606 かご, ツバキとりかご……	62		みの, シュロ帽子	38
607 箕, 喪服, 周衣(朝鮮半島4, 中国台湾省1)	5		背負かご	1
608 609 欠番			はと笛, 笛……	31
610 イタヤ細工製作工程見本	8		郷土玩具, ウソ, 手まり……	45
611 背中当, ざる, なべのふた, そばすくい……	46		こま(独楽)(うち朝鮮半島1)	51
612 桑つみかご, 背負かご, 巻輪……(うち朝鮮半島2)	27	6西	たてきね(うち朝鮮半島1, 台湾2)	14
613 ざる	1		からさお	5
614 おとり入れ, タツの口, かご	23		くわ, 風ろくわ, 備中くわ	18
615 鳥かご, 桑つみかご, 手かご	11		かま, のこぎりかま	41
616 フジみ, もみとうし, 桑ふるい	16		機(はた), 木ばち(マイクロネシア)	5
617 ふるい, み, くま手(うち朝鮮半島1)	17		ワラビのでん粉とりのふね	1
618 魚かご, 槍, 箱……(うちスマトラ1, バリ4, ジャワ1, 朝鮮半島1, 台湾1)	16		わらぐつ, 草履, わらじ	28
619 かご……	5		むしろ編み機	2
620 なべしき, 火打箱, ふご……(うち朝鮮半島1)	15		なた, なたのさや	26
		6南	かめ, 焼物	16
			かさ(インドネシア2, 朝鮮半島2)	4
			つきうす, すりうす	16
			くま手(うち朝鮮半島1)	5
			雪かき	14
			さらえ, 土くれ打ち……(うち朝鮮半島3, ドイツ1)	14

からさお	8	213	うけ, ぶったい	3
たてきね (うち朝鮮半島2)	18	214	網, うけ……	6
6北 郷土玩具	191	215	シジミとり, 網	7
からすき, すき, せんば……(うち朝鮮半島1, ビルマ1)	20	216	網, うけ	8
背負はしご	31	218	ぶったい, やす, うけ,	5
機 (はた) (朝鮮半島)	1	219	やす, 網	7
ござおり機	1	220	うけ, 網 (うち台湾1)	15
み, 油しぼり器……(うち朝鮮半島1)	7	221	網, のりすき台	5
		222	のりしび, うけ(うちマイクロネシア1)	2
		223	うけ, 魚かご	7
		224	うけ	7
		225	うけ	21
第2室 (漁具室)		226	うけ (うち台湾1)	19
200 船の模型	2	227	タコつぼ (うち朝鮮半島1)	5
201 きじ針, 漁網	13	228	うけ	2
202 田げた (おおあし)	15	229	うけ, 網	2
203 魚おけ, 水中眼鏡……	5	230	うけ	5
204 いそ箱	11	231	うけ (うち中国大陸2)	18
205 あかくみ, ざる	9	232	浮き	3
206 つり針, やす, きじ針	78	2東	やす, かい, 振り棒……	29
208 ぶったい	4	2西	網 (見本)	1
209 船の模型 (うち中国2, シンガポール1)	9	2南	水車の車	1
210 舟の模型	10		のり下た, 浜下た	7
211 舟の模型 (うちスリランカ1)	16			
212 いかり	6			

附表3 草間このえ氏, 草間千代氏によるあしなかの収集⁹⁾

収集年月日	採集地名	6・6	新潟県東頸城郡松之山(湯山)
1937		6・7	// // 松之山(小谷 兎口)
5・20	新潟県東頸城郡松代 (小尾丸)	6・9	// // 浦田 (浦田)
5・23	// // 安塚 (安坂)	6・10	// // 浦田 (崩田)
5・26	// // 安塚 (下保倉)	6・10	// // 菱里 (上山)
5・27	// // 安塚 (小谷嶋)	6・12	// // 菱里 (二本木)
5・27	// // 保倉	6・13	// // 小黒 (朴ノ木)
5・28	// // 旭 (田麦)	6・14	// // 牧 (荒井 タカオ)
5・29	// // 旭 (嶺藤尾)	6・20	// // 中頸城郡鳥坂
5・30	// // 山平 (儀明)	6・21	// // 大鹿
6・3	// // 松之山(坪野)	6・21	// // 原通 (上大塚新田)

9) 財団法人日本民族学協会附属民族学博物館『民具標本収蔵原簿』による。同地方から収集されたあしなかには、このほか収集者名が記入されていないものがあり、これは何かの都合で記入をさしひかえたものと考えられるので、両氏の収集はこの倍以上にのぼると思われる。表中、()内は字名。

		上原新田 坂下	8・25	新潟県西頸城郡名立
		小原新田 大原)	8・26	// // 名立 (折居)
6・22	潟県中頸城郡	原通 (四ツ谷 花房)	8・27	// // 名立 (七山)
6・23	// //	関山 (桶海 大谷)	8・30	// 東頸城郡浦田
6・24	// //	豊葦 (樽本 上樽)	9・1	// 西頸城郡能生谷(溝尾)
6・25	// //	豊葦	9・2	// // 能生谷 棚口
6・26	// //	上郷 (東関)	9・3	// // 能生谷(下倉)
		原通 (大沢)	9・6	// // 能生谷(ウズラ石)
6・27	// //	上郷	9・7	// // 大和川(坂井)
			9・7	// // 西海
6・29	長野県下水内郡	柳原	9・8	// // 西海 (真光寺 中余)
7・6	//	下高井郡往郷	9・9	// // 西海 (来海沢 釜沢)
7・8	// //	木高	9・11	// // 下早川(日光寺)
7・11	//	小県郡 中塩田	9・14	// // 上早川
7・23	新潟県中頸城郡	原通	9・16	// // 上早川(大平)
7・26	長野県北佐久郡	五郎兵エ新田	9・17	// // 上早川(砂場)
7・29	//	南佐久郡切原 (皿田)	10・2	// 中頸城郡新道
7・30	// //	切原		
7・31	// //	栄 (上村)	1938	
8・1	// //	畑八	3・6	// // 大瀧
8・2	// //	畑八 (大上野 上畑)	3・11	// // 柿崎
8・3	// //	栄	3・13	// // 下黒川
8・4	長野県南佐久郡	青沼	3・14	// // 黒川
8・7	// //	平賀	3・16	// // 吉川
8・8	// //	平賀 (瀬戸)	.	
			3・20	// // 吉川
8・14	新潟県中頸城郡	下黒川	3・21	// // 吉川
8・18	//	西頸城郡木浦	3・22	// // 旭
8・20	// //	能生谷(小見)	3・23	// // 旭
8・20	//	中頸城郡黒川	3・23	// // 永
8・24	// //	桑取 (北谷 吉尾)	3・24	// // 八千浦